

しつかり握りしめて、「江戸への道中、よくよく気を許すまいぞえ、さあ、チャット立たっせえ」と、せき立てるのである。俺もいよいよの瀬戸際に差しかかったことを感じ、金包を胸巻に収めて、取るものも取りあえず草履をつっかけた。「川沿いの間道を伝わって藪原に出て、鳥井峠を登りきり、向うに下りれば、塩尻峠につながる道に出る。それを越すまでは、よくよく人の顔を見んように、な。藪原のおふくろにも会うまいぞえ」との親方の注意もそこそこに、夜気去りやらぬ村を抜け出て俺は間道に分け入った。

### 阿呆鳥

霜枯れた通草を取っては食いながら、藪原地籍にさしかかったのがその日の午後。檜林を抜け出ると風花が舞っていて鳥井峠は雪の模様。親方の言葉も心に残ってはいたが、おふくろの後姿に一目をと、家の裏手へ廻り戸の隙き間から覗くと、おふくろは俺の布子でも縫っているのか針に余念がない。囲炉裏の火に浮き出された影絵のような姿に足をうばわれた俺は、手を合わせる思いで、長いあいだ軒下に行んでいたが、やがて心を取り直し、軒端の干大根をふところに押し込み、かけてあった蓑笠とこんぞを抱きかかえてその場を立ち去った。

鳥井峠にかかるると、闇の中で寒まじりの風が笠を吹き上げて、首筋から舞い込む雪が背筋で溶けた。俺はこんぞに縄を

巻きつけ、滑る雪坂を懸命に登りつめた。峠の頂上に出ると、雪はカラッとあがり、天界の闇がにわかには拭かれて、燦銀の紡錘を植え立てたような木立の谷が、まだ眠りから醒めぬ下界の村へとつながっていた。氷で固まった御岳、駒ヶ岳、乗鞍の山々の頭は、明けそめの薄陽に染まって、俺を見送るかのようには微笑んでいた。突然、頭上の樞の大木の枝から鳥が雪を蹴立てて飛び立ち、阿呆々々と鳴きながら明けやらぬ谷へ舞い下りて行った。

鳥井峠の北谷から塩尻峠へ続く谷間には根雪になるほどの雪が積もっていて、こんぞの丈けが埋まるほどの深さもあったが、雪道を歩くことには馴れている筈の俺が、ひどい目脂に悩まされて、道を踏み外しては雪溜りに落ち込んだ。

諏訪の寒蛭が眼にいいとか、八ヶ岳山麓の延命水が万病に効いて眼には請け合いだとか、または、大菩薩峠の水で眼を洗えば盲も開眼するとか、行きずりの人達からさまざまな勧めを聞いて江戸へ辿りついた旅鳥は、寛永初年の暮に、にわかには明るさを失って盲となってしまった。

### 遍路歷程

勝手しらない大江戸の、八百八丁の裏路を、杖一本を頼りにて、にわか言の悲しさに、あっちの溝にはまり込み、こっちの堀につき当たり、叶わぬことの数ありて、世のはかなさを知るうちに、この天地に生を得し、五尺の丈けの一芸と、阿呆鳥

は鳶をまね、ピーヒョロヒョロの笛流し、按摩上下十六文。

この業に甲斐を得て、幸多き人の世に、我も生きながら願いもち、四季の色香の移ろいを、独り秘かに楽しみつ、雪の夕の冷たさを、見知らぬ宿の鉢の木に、花の朝のひもじさを、春告鳥の音に忘れ、若葉の風は空しくも、月の朧ははかなくも、行く雁がねの遠くして、笛の調べの近ければ、今日一日の生き死にを、煩うことはなかりけり。

逝く歳月はやまずして、此の世の旅の長ければ、瞼の裏に焼きつきし、故郷の山河変らねど、人の姿は消え失せて、辿りつきたるこの関に、行き交う者は言葉なく、伴れそう者の影はなく、雪大木戸を擁すとも、雲は伏せ屋を閉せども、いたわる杖に力えて、笛の細音を聞く人の、心ぬくもる旨酒に、行くも帰るも逢坂の、知るも知らぬも関こえて、京に上りて検校の、位を獲んと発心す。

腰の路銀の重くして、四谷の谷の深くして、またその坂の長ければ、ここを峠に永住みて、愛住みなれし幾年を、昨日は南今日は北、左ききなる左門町、酒の肴の塩町や、その伊賀町忍び足、街角多き辻々に、道陸神の招きをば、今日か明日かと待ちわびて、人の情の内藤町、何の縁か知らぬども、大黒様のお導びき、今日この宿に招かれて、心うれしき木曾の香の、久しぶりなる懐しき、つい気安さのあまりにて、幼なき頃の思い出や、若き姿の誇りを、声高らかに歌いあげ、独りよがりの長談義、……。

### 有由有縁

按摩の話がここまで来ると、庄右衛門は寝返りをうって目をあげ、「寒い」と云う。按摩はいい潮時を捉えて話を打ち切る心構えをしていたのだが、つい口が滑ったふうで、「寒いのは酔が醒めたせいもござんしょうが、こんなに胃の腑が無一文じゃあ、旦那、身体がもぢませんや」と、親指で胃の裏側を探るように圧して、「鳶がさらう油揚げというものが身体に力をつけることは御承知でしょうが、それより何より身体がぬくもるものは赤犬の肉でござんす。つい先頃、犬の肉鍋屋が荒木横丁に店を開き、手前もさいぜん寄って見ました。按摩と犬は敵同志、不倶戴天の敵の肉で、これこの通り



川端康成氏の書

ぬくぬくと顔がほてり……」と云って、犬鍋の効能について庄右衛門に語りかけたが、どうしたものか、「それで」と、云ったまま口ごもり、考えこんでしまった。



四代將軍の弟綱吉(犬公方)が五代を嗣ぎ、△生類憐令▽を出して犬を保護したのは、これからまだ三十年あまり後の

貞享四年であるから、承応の時代はまだ犬狩りは自由であったであろうが、仏教の影響で一般の人達は四つ足を忌避していた。

ところが、玉川上水の人足たちは、四谷界隈で狼藉を働らくばかりでなく、四つ足を食えばお足がふえるという粋な迷信にもかられて、夜な夜な捕り縄を腰にして各地に神出鬼没野良犬を蒐めて来てはこれを煮て食っていた。調理の中で一番人気の集まったのは生姜味噌の煮込みで、彼等はこれを△わだつみ鍋▽と称して、鍋を車座にかこみ、あぶくを掻き廻しながら、うまいまいと腹鼓を打っていた。

犬狩隊の隊長格の男が、これを商売にすれば繁昌間違いなしと、△あすなろ家▽という屋号の店を構えたのだった。上水工事の人足頭であった彼は、手下が蒐めた犬を撲殺して店にあてがい、客扱いの方はいっさい女房に委せていた。

荒木横町の露路奥九尺二間の素人家を改造したあすなろ屋は、玉川上水の人足達の溜り場となっていて、むさ苦しい土間にいくつかの七輪が置いてあって、そのまわりに空き樽の腰かけが置いてある。

開店披露中のこの店の片隅に、一人の按摩が腰を卸して、鍋をつつついていたが、燗を持って来たお内儀に、世辞もつかぬふうに、「味もいいが、檜の箸の香りが何とも云えぬ、久しぶりに木曾へ帰ったような気がするぞ」と云った。

すると、お内儀がしげしげと按摩の顔を覗きこみ、「まさ

か木挽のソレ……若い衆じゃなかるう、かね」と云う。その問いかけに按摩は下を向いたまま黙考していたが、ややあって、読めたという表情で、「お鶴ちゃん、全く久しぶりだった、ね」という。

### 犬侍の血刀

丑の刻の別れ以来、お鶴と再び逢うことがあろうとは夢にも思わなかった按摩は、木曾を抜け出て来た後も、季節外れの生暖かい野分が吹くと、お鶴幽霊を思い起して、かりがねの便りにも托して、詫びの一つも云いたい気分になることもあった。お鶴の方もあんなことがあって、お参りの御利益がフイになったが、これも猫八の了見のためではない、江戸へ出たら何かの拍子に顔を合わせることもあろう。その時には人の世の不思議な絆をたぐり寄せ、今はない父とのもつれ合をもきれいさっぱりと水に流すことができようと思うこともあった。が、いま目の前に年を経た盲の何気ない風体に接してみると、此の世のしがらみから、いまだに足が抜けずに、犬侍の錆び刀に後生を托している自分の夫の姿にあわれがつのる気がして、お鶴は急ぎ込んだ調子で三昔前からの来し方をこんなふうにあ按摩に語り聞かせるのだった。

妾は兵頭の一入娘で、父が尾張から木曾へ廻った頃、母を喪い、母のいない家を切りもりしていたが、父のお仕置き後は身寄りがないので独り暮らしをしていた。父の配下で父と仲間

を代官に売り、その娘のお美代に近づくこととした梅林藤四郎は、人柄の悪さを代官に見抜かれて、代官屋敷から追い出されて、事もあろうに妾のところに来て来て、夫婦になってくれと云い寄るのであった。父を陥し入れた藤四郎とは仇敵の間柄である妾が、どうして一緒にになったかは、恋は思案の外という言葉で理解して貰うより仕方ない。藤四郎の妻になった妾は、三つ子の魂百までも、飲む打つ買うの三拍子揃った男と共に、木曾を食いつめて江戸へ流れて来たが、六十年の不作といわれる半分を貧乏のしずめで過して来た。尾張様のお屋敷続きの荒木横丁に知り合いを頼って暮らしているうちに、運というものが向いて来たのか、今年の春、夫は玉川御上水の人足頭に取り立てられ、夫はその方で稼ぎ、妾はこの方ですと、お鶴は銚子の底を揺すって酌をするのである。

そして小声で、こんな因果な商売でも生きてく道には変りはなく、どなたに遠慮はないけれど、いまだに夫が酔いでもすると、「木挽のところ」に代官の娘・お美代に大金を届けさせた。それを猫八が猫ばばきめて江戸へ逐電しおった。八百八丁の溝板をはがしても、あの糞猫を探し出し、金を取り返してやる」という。こんな因果があの人につき纏って、いまだに眼が開かない。これが閻魔に眼を抜かれた餓飢畜生というものでしょう、と云う。

按摩は自分の目頭をさすり、腹の金包みに手をやって確かめ、何か云い出しそうな素ぶりだったが、一本指をお鶴に示

して、酒を所望した。その時、裏手に犬のわめき声にわか  
に湧き立ち、一人の男が血刀をさげてノッと這入って来た。  
お鶴は按摩のふところにそっとお捻りを押し込み、「有り難  
うございます」と、追い出す様に表に送り出した。

鉛色の空から、雪がしきりと降り、按摩の首筋から舞いこん  
では背筋で溶けた。二の字の下駄の跡が闇の大木戸の方へと  
続いて行き、笛の音が黒屋のあたりで、ポツリと止んだ。

## 湯屋横丁

さて、揉み終わった按摩が、敷居際にいざり、庄右衛門がこ  
れに金子を投げ与えて、按摩がこれ押し戴いて立ち上ろう  
とすると、障子が開いて弟の清右衛門が入って来た。ぬれ  
鼠のように濡れそぼち、着物の裾から雫がたれている。

「川にでも落ちたのか」と、問う兄に、弟はこう語った。そ  
の話を補足すると――

春以来、兄弟が力をあわせて高井戸まで掘り上げてきた素  
掘りが秋の豪雨で押し流されてしまい、工事継続の追加金を  
幕府に願ひ出たところ、当初の工程の実現をみるまでは、追  
加金はまかりならぬとの達しで、自力で金融の道を開拓しつ  
つあった庄右衛門は、先祖伝来の田畑を悉く売り払い、更に  
女房の里方の所有であった芝口の屋敷も換金して、それまで  
の支払いに充てていた。

弟の言い分は、「玉川御上水は將軍家の直轄工事で、豪雨

による天災の被害は当然お上が負うべきものである。追加金  
の支払があるまでは工事は停止すべきである」と、いうので  
ある。これに対して兄は、「理くつはそうであっても、この  
場合はそういうわけにはいかない。將軍家の御用を承るだ  
けでも家門の名誉である。まして上水完成の暁に、八百八丁  
の水不足が解消し、莫大な財産を烏有に帰しつつある江戸の  
華が防止できるならば、我が家の財産の一つや二つが失われ  
ても、決して惜しくない」と、いうのである。兄弟の意見

がこんな具合に対立したまま暮を迎え、木挽、大工、石工、土  
工などの賃銀の支払いに上まっていた庄右衛門は全く頭が痛  
かった。彼のところには毎日これらの代表が押かけ、越年資  
金の支払を迫っていた。先ほども木挽の仕事場を見廻って  
いた庄右衛門に、支払を強要した彼等が大鋸屑を投げかけた。  
庄右衛門は今晩もこれら招かざる客の来訪を予期していた。

兄の意見と反対の立場をとる弟清右衛門も、従業者の困窮  
を目のあたり見ては、じっとしては居られず今日も朝から各  
方面の高利貸を訪問して金策に努めたが、何ほどの金も借り  
られず、最後に湯屋横丁の安井屋にむしんを言いに向いた。  
主人不在で彼が安井屋の店を出ると、店先で団体交渉の連中  
につかまり、つるし上げをくっていたが、双方の語気が昂調  
し、憤激した労働者が清右衛門の頭から湯を浴せかけた。残  
念ながら多勢に無勢、下手人は取り逃してしまった、とい  
うのである。これが湯屋横丁事件の荒筋である。

## 小判百両

去りやらず側に控えてこの話をジッと聞いていた按摩が、  
いたく感無量の面持ちで威儀を正して云うよう、「愚生いさ  
さかの御縁にて今夕この場に罷り出で、お話の始終を聞き及  
び申し、まことに感慨深いものが御座います。困を出てから  
三十年、その折思いがけず入手いたしましたる仏の路銀、肌  
身はなさず永年暖めっぱなし、まさか虱の餌食にはなってい  
ない筈」と、胴巻きから金包を取り出して庄右衛門の前に置  
き、更に語を継いで、「久しい座頭稼業の足を洗い、京に上  
りて検校の位を獲んものと心掛けてはおりましたものの、三  
途の川の渡し銭にも事欠かぬ今日、この上、栄爵の重荷を求  
めて僱促と、もがいてみても同じこと、手足纏いの厄介荷、  
さらりと捨てて大川で、ケツを洗ってさっぱりと、そんな気  
分になりました。おはずかし額には御座いますが、めく  
らの分際にて、などとお咎めなく、気安く御用にお使い下さ  
いまし」と、云って立ち上った。

庄右衛門は、「どこの御仁か定かに知らず、お言葉に甘え  
申す訳には参りませぬ」と、押し戻したが、按摩はこれを受  
けず、「有る時払いの催促なしで、担保は玉川のお水でござ  
る」と、朗かな顔つきで女中に手をとられて階段を下った。  
弟清右衛門がこれを追って、「お名前だけでも」と、せまる  
と、「坂丁に住む按摩」と答えて、雪の街に消えて行った。

庄右衛門が紙包を開いてみると、大小あわせて百両の小判  
が出てきた。彼はいづれ他日按摩を招き、利息、返済期限な  
どの取り極めをして、改めて証文を手渡ししたいと思っただ  
れ以来この按摩は大木戸界隈に姿を見せることがなかった。

## 明 暗

翌承応三年（一六五四）夏六月、清冽な水はこんこんと江  
戸に湧き、府内の住民は上下を挙げて歓喜し、三日に亘って  
盛大な祝祭が催うされた。四谷界隈の町民は水道工事に協力  
したというので、特に大通りの左右に分水を許され、一ヶ町  
五箇所の割で水請井戸を設けられた。兄弟両名はこの功によ  
り、玉川の姓を賜わり、帯刀を許されて、祿二百石を下賜さ  
れた。後年、上水役を命ぜられ、水賦金の取り立てを委任さ  
れ、子孫は継いでその職にあったということである。

その論功行賞の日、將軍家綱の前に召し出された庄右衛門  
と清右衛門に、「何か他にのぞみがあるか」との中間があっ  
た。庄右衛門は、「畏れながら……」と前置きして、按摩の一  
部始終を言上した上、「この座頭を検校に取り立てて頂きた  
い」と願ひ上げた。感慨深げに耳を傾けていた家綱は、「殊  
勝な者じゃ」と、嘉賞の言葉を洩らし、即刻この座頭を探し  
出すようにと、奉行に下命した。江戸町奉行あげての大搜索  
にもかかわらず、四谷坂丁はおろか、府中にその影は見出せ  
なかった。



江戸近郊八景小金井橋夕照（広重集より）

幕府は玉川上水が開鑿されてから十六年目の寛文十年（一六七〇）に、上水を町年寄（奈良屋市右衛門、樽屋藤左衛門、喜多村彦兵衛）の支配に委せた。この時、従来一間巾だった水路を巾三間に掘りひろげ、水路の兩岸に三間巾の土堤を作り、南側を喜多村彦兵衛に、北側を奈良屋市右衛門に与えた。この町年寄兩名はその土堤に、自費をもって松と杉の苗を植え、沿岸の住民が塵芥などを投げ入れないように美化地帯を作り、高札などを立てて住民の協力を要請した。小金井の桜として今日も名所となっている上水堤の桜の植樹年代は、この時代から更に六、七十年後の元文年間（一七三六—一七四〇）頃と推定されている。

ここに掲げた「小金井橋夕照」は、更に下って安藤広重（一七九七—一八五七）の筆になるものであるから、この櫻の樹令は凡そ百年を経たものと見られる。新編武蔵風土記稿によれば「上水通り小金井橋上下、兩岸ノ櫻樹數百株、凡二里許ノ間ニ亘レリ。是ハ川崎平右衛門定孝ノ栽ニル所ナリト云フ。花時ノ盛ナル都鄙ノ人々遊賞スルモノ路ニ相ツツケリ」とある。

## 後日譚

今から十数年前、承応を隔たること三百余年の歳末。師走の街には風花が散っていた。私は地下鉄工事でせわしい四谷大通りから、昔、おかりや横丁とよばれた路地にまがり、急ぎ足で、坂町の我が家へ戻って来ると、飯場の庭に、古材が折り重なって積まれている異様な風景に出会った。二人の夫婦が、悪臭を放つ泥だらけの朽ち材に、薪割りを振って挑んでいる。こなされた薪の傍らで、控えの二人が焚火に余念がない、

「寒いね」と云って、私も焚火の仲間になった。「これは、一体何だね?」と訊くと、彼等は、「そつたらこたアわかねえじゃなあ、聞いたベエ、江戸ズだいの水道管、へてだよなア。ツぶんダつのスこと場から、こつたらものが出はって来て、風呂屋サくれベエと、へつたが、みなおゴとわりくらって、貰い手もねえ、捨て場もねえ。への木はだめだア、

ゆんぶくでだめだア、しんでえもんなア」と云い合うのである。焚火の煙からは、たしかに尾州（木曾檜）の匂いが嗅ぎとれるのである。

そこに現場主任があらわれて、「早いところやっつけないと、あとゾクゾクと出るぞ、気合を入れて、精を出してくれよ、なあ」と云う。私はこの主任に、「これと同じ石数の薪と交換してくれませんか」と云うと、「薪なそとんでもない、只であげるから、全部、これから出る分も、責任をもって片付けて下さいよ」との返事である。

この四谷出土の分は、本文中の、大木戸から江戸城へ引き込んだもので、尾州材を板に挽き、箱に造ったものである。その後、桜田門周辺から出土したものを大量に確保した。この分は井伊家など武家屋敷へ配水したもので、前のものから見れば時代もくんだり、箱管

ではなく、一木の凹字彫りである。材は地の檜と松。時には栗もある。

さて、江戸城の水道余水は、大手門から出て、日本橋方面まで流れ、この方面の町民を潤おした。その尻は三十間堀へでも流れ込んだものであろう。また、水道橋は本文冒頭に記した初代家康の開設で、玉川上水とは別の水系の神田上水にゆかりの名称である。そして、玉川高島屋ショッピングセンターは、多摩川の下流の二子橋にある。

かつ吉三店（日本橋、水道橋、玉川）の所在は、奇しくも、すべて水道に縁あるところとなっている。「担保は玉川のお水でござる」と云って消えた坂丁の按摩が、抵当権の行使を留保したまま、坂町に住んでいた私に、水道材を全部かたづけさせるとは、何か由縁がありそうである。

さて、江戸初期から土中に埋没していたこの材の芽生えに思いを及ぼすならば、伐採の時に二百年生とすれば、今から五百年前、ちよんど応仁の乱時代に生えたことになる。ともかく「へのきは、ゆんぶくで、しんでえもんで、俺あ助かっただア」とつくづく思う次第である。

（かつ吉主人）